様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2022
課題番号：１６Ｋ０２４８３

研究課題名（和文）米国舞台芸術の理論と実践におけるサブジャンルの成立と発展―人形・仮面・演じる物体

研究課題名（英文）Puppets, Masks, and Performing Objects: Theory and Practice of Puppetry in American Avant-garde Theatre

研究代表者
戸谷　陽子（TOTANI, Yoko）

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：３０２６１０９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：1960年代以降、前衛舞台芸術の流れの中で先鋭化した、仮面、演じるオブジェを含む広義の人形劇を、理論的な言説の把握と、具体的な作品・作家および舞台芸術環境という二つの視点から検証し、サブジャンルとしての人形劇の概念枠を検討した。
具体的には「西欧モダニズム演劇における身体および人形をめぐる芸術概念の成立」「米国オルタナティヴ演劇における身体および人形をめぐる実践―その政治性、芸術性」「高等教育における人形芸術家の養成とネットワーク化」の視点から、調査・研究を行い、「世界演劇における人形劇とアメリカ演劇の関係性」を念頭に合衆国の舞台芸術における意識の分布図の変化を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
一般に子ども向けとされる人形劇は、世紀転換期モダニズム芸術家が前衛芸術の表現形式として可能性を見出して以来、表現芸術の形式として採用され、前衛演劇分野におけるサブジャンルとして定着した。本研究はその発展史を、理論と実践の両面から検討し、歴史化・理論化を試みた。近年は前衛のみならず、商業演劇・娯楽産業にも大いに反映され、非／主流を問わず、この現象は現在形で展開しており、世紀転換期に深化した演劇における人形やロボット、人造人間等のカテゴリはさらに20世紀後半以降サイボーグやポストヒューマンといった概念を人形劇に呼び込み進行しており、本研究は今後の身体表象の在り方について考察するための指標となる。

研究成果の概要（英文）：Turn-of-the-century modernist artists saw puppetry to have potential as a form of expression in avant-garde art which flourished in both avant-garde and commercial theatres. This study examines puppetry in avant-garde theatre from theoretical and practical perspectives and attempts to consider the conceptual framework of puppetry as a subgenre in contemporary theatre. Specifically, the study explores topics such as “the formation of artistic concepts of the body and puppets in modernist theatre,” “practices of puppetry in American alternative theatre,” and “training and networking of puppeteers in higher education.” The categories of puppets, robots, and artificial humans in theatre, developed at the turn of the century, have also led to concepts such as cyborgs and posthumans in puppetry since the late 20th century. By examining those concepts of the human body, this study provides an index for considering the future of physical representation in contemporary theatre.

研究分野：アメリカ演劇

キーワード：Puppetry　Avant-garde Theatre　アメリカ前衛演劇　Bertolt Brecht　前衛人形劇　Ballard Institute　Jim Henson Foundation　Bread and Puppet

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1．研究開始当初の背景

研究代表者がこれまでの研究で検証してきた、演劇における上演とシアトリカリティ、身体や異文化領有および他者性の問題、実践家・制度双方のポリティクスの意識、グローバル化する世界市場における前衛演劇の商品化と拡散、演劇技術の実践教育と制度といった問題は、広義の人形劇と前衛舞台芸術との交差地点にも顕著に表れており、これをサブジャンルとして定位し、その成立と発展を歴史的文脈および現状の中で位置づけ今後を標榜する概念枠を提示したいというのが本研究の問題意識であった。

2．研究の目的

本研究の目的は、アメリカ合衆国の現代前衛舞台芸術における身体・越境・テクノロジー、文化政策、芸術／教育制度の諸問題について、対象を人形・仮面等の「演じるオブジェ」（John Bell、2006）、すなわち広義の人形劇に特化し、合衆国に独自に展開した前衛舞台芸術形式および実践活動として、その美学的・政治的戦略、ジャンルの成立史と制度化に至る過程を検証し、包括的な考察を行うことで、前衛舞台芸術および現代アメリカ演劇史に出現したひとつのサブジャンルとして再定位を試み、今世紀の展開を標榜するための新たな学術的指標を提示することにある。

3．研究の方法

本研究では、1960 年代以降、前衛舞台芸術の流れの中で先鋭化した、仮面、演じるオブジェを含む広義の人形劇を、理論的な言説の把握と、具体的な作品・作家および舞台芸術環境の検証という二つの視点から検証し、サブジャンルとしての概念枠を定位する。このためまず近代以降の演劇史の文脈における人形劇を再検討する作業を進めつつ現状を検証する。具体的には、科研費の交付を希望する 4 年間に、「西欧モダニズム演劇における身体および人形をめぐる芸術概念の成立」「米国オルタナティヴ演劇における身体および人形をめぐる実践―その政治性、芸術性」「高等教育における人形芸術家の養成とネットワーク化」の 3 本の柱を立て、おおむねこれに沿って 1 年ごとに各柱を中心に調査・研究を行い 4 年目には「世界演劇における人形劇とアメリカ演劇」（いずれも仮題）として合衆国の舞台芸術における意識の分布図の変化を考察、総括する。

4．研究成果

合衆国における前衛演劇に採用される広義の人形劇（含仮面・オブジェ）の実践を多方面から体系化して検証することを予定していたが、研究期間内に複数の理由で研究を中断することを余儀なくされたため、当初の予定よりは、文献調査と、オンラインによる情報収集が研究の割合を占めることとなった。その結果、歴史的な文脈を詳しく検討することができた一方で、2020-23 年まで新型コロナ感染症の拡大により、海外調査を実施することが著しく困難になったため、人形劇実践の状況について実際に現地調査することはかなわなかった。

研究の初期段階では、まず、研究テーマ「西欧モダニズム演劇における身体および人形をめぐる芸術概念の成立と合衆国前衛演劇における人形・身体・テクノロジー」に沿って、基礎研究を進めた。西欧演劇における人形の概念は、舞台上の身体についての概念の展開とともに発展をみた。先述のようにジャリによる『ユビュ王』（1888）がさまざまなモダニズム演劇の実験の始めとされるが、以降ギニョル（仏）やパンチとジュディ（英）等大衆演芸、ロシアの人形劇をバレーに作品化

した『ペトルーシュカ』(1911)等、隣接ジャンルを巻き込む形で展開する欧州の前衛演劇史を概観し、舞台上における人形および身体の概念の変遷を検証した。参照項として V.メイエルホリドのビオメハニハと身体の概念(1922)、E.G.クレイグの俳優論『俳優と超人形』(1911)、アントナン・アルトーの『演劇とその分身』(1938)、ベルトルト・ブレヒトの叙事演劇の理論、イジェイ・グロトフスキの俳優身体論『演劇実験室』(1965)、メルロ・ポンティの身体論等を中心に基礎研究を行った。アルトーとブレヒトが、各々東洋の演劇に影響を受けて、その形式やスタイルを領有しつつ理論化し、言語やナラティヴの構造を解体し、身体に新たな意味付けを行った結果、西欧のリアリズム中心の劇構造は解体されてゆくこととなる。さらに 20 世紀以降の技術革新を反映し、人間の身体の概念が、人形との関係において検討されたのみならず、ロボットまたは人造人間といったカテゴリと密接に結びついて展開したこと、さらに 20 世紀後半のサイボーグやポストヒューマンといった概念を、人形劇に呼び込みつつ、新たな身体の捉え方が深化したことがうかがえた。

上記の歴史・理念的な基礎研究と並行して、米国の人形劇関連の団体および人形劇制作・人形師養成の制度についての基礎調査を開始した。ユネスコの外郭団体 UNIMA 米国支部・Center for Puppetry Arts(ともにアトランタ) Puppeteers of America(ミネアポリス)、Jim Henson Foundation(ニューヨーク)、University of Connecticut(コネティカット州)等の存在について、訪問調査を前提にウェブなどで情報を収集した。残念ながら新型コロナ感染症の拡大により、訪問調査は実施できなかったが、コネティカット州立大学附属の Ballard Institute of Puppetry Museum その他のオンラインのセミナーやシンポジウム企画に参加することで、人形劇実践者のみならず、研究者と交流できたことも成果のひとつである。これらの研究者は日本の人形劇にも大きな関心を寄せており、文楽のみならず、四国の伝統芸能を研究する学者や実践家との交流から、日本の人形劇にも視野が広がり、積極的なコラボレーションの実験が散見されることとなり、それらを検証することが今後の課題となった。

コネティカット州立大学人形劇学科は米国でも有数の研究者や実践家を輩出してきた、実践を含む人形劇の高等教育・研究機関であるが、理論と実践を繋ぐ制度の充実が米国の人形劇を支えてきた要因であったことが確認され、「高等教育における人形芸術家の養成とネットワーク化」とのテーマを設定し、合衆国内における人形劇を制度の観点から検証した。本研究では、テレビや映画等の映像表象や子どものみを対象とした作品はおおむねは除外することとしたが、セサミストリート創始者の故ジム・ヘンソンの功績は大きく、ヘンソンが設立した財団についての情報を収集し、人形劇の制作全般に携わる人々によるヘンソン人形劇の技術の継承、その技術をもつ人形師やアーティストが舞台芸術分野に向かうルート、商業化に向かうルートの検証も試みた。高等教育・研究機関のみならず、ヘンソン(セサミストリート等)工房周辺では実質的な技術者を養成する環境が存在しており、そこに従事する技術者やアーティストらが、個人で非商業の分野の制作にかかわることも多く、技術の変革のルートも存在することが明らかになった。また、子ども対象が主眼ではなく、実験演劇分野の芸術家がヘンソン財団の助成を受け作品を制作するような機会をヘンソン財団が提供している事実も人形劇と前衛演劇の境界を拡張することに貢献している(ヘンソン人形劇祭等)。

このように、高等教育機関で人形劇の理論と実践を提供する制度は、研究者や実践家を養成するのみではなく、広く芸術教育を受けた観客をも養成するという役割をも担っている。人形劇のみならず、演劇を含めた芸術全般が、高等教育において教授されるという制度は、芸術を享受する側(観客)が質の高い芸術を要求する知識を手に入れるという点において興味深い。翻って日本の状況を鑑みるに、人形劇はもとより、演劇を高等教育機関で専門的に研究・教育・実践する制度が歴史的に整備されてきたとは言い難く、芸術教育の在り方について、示唆を与えるものであ

る。

先に言及した広義の人形芸術の（合衆国、日本、東南アジア、東欧を中心とした）境界往来は、合衆国内独自の現象ではないが、大胆に他者／他文化の伝統技術を採用して新たな展開を生む合衆国のアーティストが、世界の他のどういった人形劇からインスピレーションを得ているかを調査するため、「世界演劇における人形劇とアメリカ演劇」というテーマを設定し、その検証も試みた。

こうしたネットワーク化に寄与したのが、1960 年代から 70 年代初期という早い時期に人形や仮面を採用して、新たな前衛演劇を牽引した、リー・ブルーアー（Lee Breuer1937-2021）、ジュリー・テイモア（Julie Taymor1952- ）、セオドーラ・スキピタレス（Theodora Skipitares1947- ）、ラルフ・リー（Ralph Lee1936-2023）、ペーター・シューマンとブレッドアンドパペット（Peter Schumann1934- ）といった演出家や造形作家、人形制作者である。例えば、テイモアが『ライオンキング』でブロードウェイに進出、ブルーアーが『欲望という名の電車』をパリのコメディ・フランセーズで演出した際に、バジル・ツイスト（Basil Twist1969- ）という次世代の人形アーティストを採用するなどにより、その存在が 20 世紀後半から今世紀にかけて広く知られることとなった。ブルーアーやリーは近年亡くなったが、前衛人形劇は次世代に確実に受け継がれていると言える。

たとえば先述のツイストは、次世代の人形芸術家として、旧世代のアーティストとのコラボレーションを通じて研鑽を積み、現在は実験的な人形（および仮面・演じる物体）を擁して独自の世界を創造する域に達している。このツイストがニューヨーク・ジャパン・ソサエティのコミッションにより制作した『道具返し』（2004 年初演）は、日本の伝統芸能から着想を得て、日本人アーティストとコラボレーションをして注目された作品であり、2005 年に舞踊作品を主な対象として授与されるベシー賞を受賞した。今後の芸術諸ジャンルの往来がさらに加速することを予見した受賞であったともいえる。

こうしたジャンルのクロスオーバーは、非営利または非商業演劇のみならず、商業演劇や娯楽エンターテインメントにおいても採用される今日、美学的主題やスペクタクルの要素の循環について、今後さらに学術的な研究として検討されるべき主題を提供している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 戸谷陽子	４．巻 58
２．論文標題 （書評）貴志雅之『アメリカ演劇、劇作家たちのポリティクスー他者との遭遇とその行方』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アメリカ文学研究	６．最初と最後の頁 84 - 90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 戸谷陽子	４．巻 1
２．論文標題 米国（主にニューヨーク市）の場合	５．発行年 2021年
３．雑誌名 「 COVID-19影響下の 舞台芸術と文化政策ー欧米圏の場合」報告書	６．最初と最後の頁 11-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 戸谷陽子	４．巻 11
２．論文標題 The “Jolly Jap” 1860 年代米国パフォーマンス空間における 日本人ストックキャラクターの形成	５．発行年 2018年
３．雑誌名 英文学研究　支部統合号	６．最初と最後の頁 105-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20759/elsjregional.11.0_105	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関